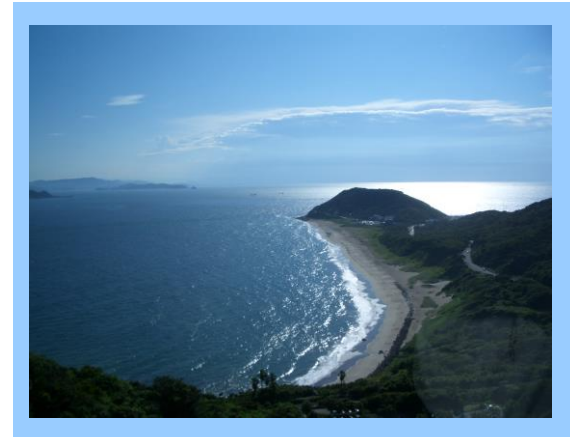


# 沙羅の樹文庫だより



旅のひとコマ 夏の伊良湖岬

**文庫あれこれ**◆ひぐらしが鳴いています。6月にはもう鳴いている、と聞いたことがあります。今年のはじめて。◆6月からつい数日前まで、記念文集の編集でんやわんやでした。私の勝手ままな企画に付き合ってくださいましたN氏はじめ、寄稿者の方々、本当にありがとうございました。読んでみてください。◆そんな慌しいなかでも、老母をつれた3ヶ月に1度の旅はあり、今回は、知多半島・河和港から高速船20分の日間賀島と、そこから30分の渥美半島・伊良湖岬をまわってきました。もちろん、母にとっては麻雀が目的。どんなに新鮮美味な海の幸を前にしても、今では栄養補助ドリンクのみの人なのですが(お魚も夕焼けもよかったですよ)。◆今月は、その老母(車椅子)とはじめてスーパービュー踊り子号でやって来ました。新幹線や飛行機での職員・乗務員の丁寧な介助に慣れていたので、ちょっとサービスの違いに驚き、腰痛の体をなだめなだめの2時間でしたが、お気に入りになったショートステイ先Jに行き、車より電車が快適だったと言ったそう。自分の親を見ながらわが身の行く末を考えるこの頃です。◆文集作成で、過去の文庫便りを振り返りましたが、まあ、これもひとりよがりなお便りに偏していますね。お詫びとお願いをしておきます。どうぞ、みなさん、力を貸して寄稿してくださいませ。森林浴さん感謝。◆新しい文庫案内リーフレットもできました。あまりかわりばえしないのですが、中には、文庫での子どもたちの写真を入れました。◆美しい満月をみあげながら思います。5年はあつという間ではなかったけれど、この先の5年はもっとゆっくり進みそう。会員のみなさんも、スタッフのみなさんもそして私も、すくすく育ち行く子どもたちから元気を分けてもらいながら、本のある暮らしを続けていきたいもの。そして、暑い暑いと言いつつ、夜の涼しさに一息つきながら。(西村)

今年度から、会費をあげさせていただきました。いただいた会費をもとに、活動できるよう、努力していきたいと思っております。ご了承ください。

## ☆これからの催し物☆

### 今月

♥海の日のおはなしかい No. 11

7月17日(日) 17:00~19:30(伊豆高原駅)

♥文庫開館5周年記念子どものおはなし会・アニメーションを親子で楽しもう

7月18日(海の日) 10:30~11:45/12:30~13:30

★子どものためのおはなし会は17日(日)でなく、でなく、18日(月)です★

### 8月

◆夏休みロングオープン(8月16日~22日)

★お詫び：調べ学習作品展は、貸出先の都合でできなくなりました★

### 10月

♪秋の夜長のおはなし会：ゲストによる朗読・語り

10月15日(土) 17:00~19:00

握手(井上ひさし)・大つごもり(樋口一葉)・役にたたない日々(佐野洋子) 予定

### 12月

★クリスマスお楽しみ・おはなし会(12月18日)

## ☆☆今後の開館スケジュール☆☆

◆8月は16日(火)~22日(月) 開館  
10:00~15:00(全日)

◆9月は変則です。10日(土)、11日(日)

◆10月は通常。15日(土)、16日(日)

◆11月は通常。19日(土)、20日(日)

◆12月も通常。17日(土)、18日(日)

※文庫の時間：土曜日は午後2時~5時、日曜日は午前10時~午後3時

※毎月開館日の日曜には、「子どものための小さなおはなし会」があります。

午前10:30~11:00

《楽しんで読み聞かせ・頑張っておはなし》

みんなで勉強会(おはなし・沙羅)

開館土曜日 11:00~13:00

それぞれの夏、深く記憶に刻む夏・・・。  
震度5にも慣れてしまったけれど、風評が風評に終わらない重さもひしひしとを感じるけれど、それでも、また暑い夏がきました。  
夏といえば、ここ・伊豆・大室高原イコール。娘時代も、母になっても、祖母になっても。みなさんが来てくださって文庫が在る。もう、やっと、文庫5歳になりました。これからも沙羅の樹文庫がみなさんの居場所のひとつでありますように。  
感謝を込めて。 さらのき

連絡先：沙羅の樹文庫

電話 0557-51-3737

## 丘お借りした本についての読後感

2011年7月13日 By 森林浴

### 「飢えのリトルネロ」 ル・クレジオ著 村野美憂訳 原書房 11.4

リトルネロとは英語の return に当たる言葉らしい。主人公はフランス女性エテルで、第1章ではパリのアパートマンに住む10才頃のエテルと貧窮した元ロシア貴族の娘クセニアとの交友や奇妙にゆがんだ家族が描かれ、第2章ではエテルが18才の頃父の愚かな投資で一家が破産し、第3章ではエテル一家は第二次世界大戦でドイツに占領されたパリからニースに「避難民」として移住、やがて戦争が終わって父は死に、エテルは恋人と結婚してカナダへ向かう。

文章が詩のようにリズムカルで美しく感じられるが、この本は恐らく翻訳でなくフランス語の原文で読んで（読めればの話だけど）、あの美しいフランス語の発音を楽しむことができれば最高なのではあるまいか、沢山出てくる地名・人名さえそれぞれ音楽のように響いて——と想像してしまう。戦争時のおぞましいユダヤ人抹殺の悪夢が低音で背景に聞こえてくる。

### 「いねむり先生」 伊集院 静 著 集英社刊 11.4

伊集院 静は山口県防府市出身の韓国系日本人2世で、本名西山忠来（にしやま ただき）。「受け月」で直木賞を受賞。二番目の妻、夏目雅子の急死から精神的に不安定となった著者本人と思われる主人公がいねむり先生、即ち色川武大との交際を通じて精神の正常化を取り戻す、そのプロセスが軽快な筆致で描かれているが、やはり色川武大（離婚で直木賞受賞）という大奇人がやたらに面白い。色川武大は阿佐田哲也という筆名で書いた麻雀小説でも有名だが、この本でも麻雀や競輪などの賭け事の話がふんだんに出てくる。382ページ以降、変な薬を飲んだ色川武大とその旧友の2人に主人公が加わって3人で深夜月光に照らされた新潟県弥彦の水田で泥にまみれて狂気の踊りを繰り返すシーンがクライマックスになっている。

### 「右か左か」 小川洋子ほか13名著 沢木耕太郎編 文春文庫 10.1

沢木耕太郎が選んだ短編集。阿佐田哲也（色川武大）の「黄金の腕」、向田邦子の「ダウト」庄野潤三の「プ

### 「書碌寸前」 森 於菟 著 池内 紀 解説 みすず書房刊 11.5（第5版）

この本は解説者の池内 紀が森 於菟のエッセイ集「医学者の手帖」と「新編 解剖刀を執りて」から選んで纏めた短編集。森 於菟は森鷗外の長男、父譲りの名作家でもあるが、解剖学者としてバランスの取れた冷徹なりアリストでもある。しかし当然のことながら死と死体の話が多いので、これには猛暑の中、ちょっと参りますね。

### 河野裕子「家族の歌」 河野 裕子・永田和宏・ほか著 産経新聞出版刊 11.6

理想的な家族一夫婦（夫婦ともに歌人で宮中歌会詠進歌選者始）・子供（息子と娘共に賞を受けた歌人）・良き友人多数。この羨望すべき幸せ家族！しかしここでは妻の河野裕子が乳癌を再発して死に到るまでの日々が本人と家族の織り成す短歌によって見事に記録されている。

### ホヤホヤの7雲集願末記

中村 慎一

ホヤホヤの文集を撫でながら、よく出来ました！と思いきりわが身を褒めてあげました。

去年の冬頃から来年は5周年になるから文集を作りましょうというお話はチラホラ聞こえていました。またまた思い付きの話に花が咲いてるようで、どうせできっこないよと高を括っていました。

3月末まで原稿出してくださいね・・・どうせロクなものじゃないだろうと思いつつも、とりあえず間に合わせておきました。その後、増築する、しない、なんていう計画が持ち上がってるようで、そこまでやらなくてもいいんじゃないの・・・と、ネガティブな発想になりがちです。これで、「文集」も「増築」も共倒れとなります・・・やれやれ何を考えていることやら。

私の知らない内に増築計画だけは、しっかり進行していたようで、あれよあれよという間にブルトナーが入り、整地が終わり、増築がはじまり、6月の開館日までには落成していました。その後、没になってたはずの文集発行の話がよみがえり、増築でお金使っちゃって、印刷屋に払うお金がないんで、出来るだけ自前で版下まで仕上げたいとのこと。

印刷屋の締め切りまで、あと2週間しかないじゃないの、それはあんまりにも無茶な話でしょう。おまけに広瀬さんは忙しい人なんで月末にならないと校正原稿が届かないということです。こうみえても私も結構忙しいんですけどね。

☆-----

変換作業をしてくれるといったでしょ・・・

校正・版下までやるなんてお約束はしていません。せめて1ヶ月くらい伸ばしてくれませんか。海の日の記念日まで何が何でも間に合わせないとはいけないんです。

だれも間に合わなくても文句いいませんよ。そう決めたんです。お願いしますわ。

-----☆

しょうがないなあ・・・やれるとこまでやってみましようか。

-----それからの2週間というもの、文書編集で深夜までの作業の連続-----

締め切りまで一週間という最後の校正のときは、細かな修正がドサーっとでる。ついに「あと1ヶ月伸ばせませんか」と弱音をはいてしまった私に

☆-----

そのお話はもうしないお約束ですよ

そんな約束はしていません・・・

-----☆

任されてはいるんですが、口だけは人一倍出してきました。

クソ一ながなんでもヤレってことね・・・わかったよやってやるじゃねえ～の。

もともと私は電子書籍派で、お金のかかる本の出版には否定的なほうです。

電子出版ならカラー写真も使えるし、音楽やハイパーリンクも使えて、校正もその場で処理できるのに、なんで今更紙なんか印刷しなけりゃいけないのよ。

グチったり・ボヤいたりしながらも、どうにか期日まで間に合わせましたが、どこかに校正ミスはありはしないかと一抹の不安を残した時間切れでした。

-----できれば次回は10周年と言わずに、毎年「電子書籍」で文集を発行できたらいいな～と思いがながら、「沙羅の樹文庫の日々」の電子書籍化に取り組んでおります。

※その後、電子書籍化も完了しましたので、下記にアップロードしました。

<http://saranokibunko.com/e-book/e-book.htm>

楽譜のページは、「さらのき文庫」の歌が流れます。目次「広瀬恒子 講演録」87ページをクリックで、ページにジャンプ

どうです、すばらしいできればえでしょう!!